

10 臍上部弧状切開法により根治術を施行した新生児外科疾患の2例

斎藤 浩一・窪田 正幸・木下 義晶
小林 隆・荒井 勇樹・大山 俊之
横田 直樹

新潟大学大学院小児外科

創の整容性から、新生児外科手術に臍上部弧状切開法を施行した。

【症例1】在胎38週5日、帝王切開、女児、出生時体重3560g。先天性十二指腸閉鎖離断型に第1生日にダイヤモンド吻号を施行。

【症例2】在胎38週6日、正常経膈分娩、男児、出生時体重3180g。腸回転異常症・中腸軸捻転に対し、第3生日にLadd手術を施行。手術操作に支障はなく、創の整容性にも優れ、臍上部弧状切開法は新生児外科手術の有用なオプション考えられた。

11 帝王切開癒痕部妊娠治療後、妊娠に至った1例

春谷 千智・水野 泉・菅井 駿也
佐藤彩恵子・斎藤 宏美・南川 高廣
遠間 浩・安田 雅子

長岡赤十字病院産婦人科

帝王切開癒痕部妊娠は、既往帝王切開後妊娠の0.15%に発生する稀な疾患であり、その治療後の妊娠に関する報告は多くはない。今回、帝王切開癒痕部妊娠の保存的治療後に妊娠に至った症例を経験した。

症例は33歳、3妊1産。前回妊娠時に帝王切開癒痕部妊娠の診断で保存的治療が実施された。治療後半年後、超音波検査で癒痕部から離れた子宮内腔に胎嚢が確認された。本症例について文献的考察をふまえ報告する。

12 分娩後異常出血に対するInterventional Radiologyの自験例

～子宮温存・妊孕性温存の

観点からの臨床的検討～

山本 寛人・倉林 工・小川裕太郎
富永麻理恵・上村 直美・森川 香子
常木郁之輔・田村 正毅・柳瀬 徹

新潟市民病院産婦人科

近年、分娩後異常出血（PPH）に対してInterventional Radiology（IVR）の有用性が評価されている。妊孕性温存が期待できるIVRについて自験例を後方視的に検討した。2012年度から6年間に当院でPPHに対してIVRを実施した12例を対象とした。IVRの状況は様々であったが、全例で子宮温存可能だった。1例で妊娠・分娩が確認された。子宮温存の観点からIVRの有用性が示唆された。妊孕性温存に関しては、さらなる症例の蓄積が待たれる。

13 当院における胎児水腫の出生前管理と予後に関する検討

明石絵里菜・生野 寿史・関塚 智之
田村 亮・五日市美奈・能仲 太郎
山口 雅幸・金子 孝之*・高桑 好一*
榎本 隆之

新潟大学医歯学総合病院
産婦人科

同 総合周産期母子医療センター*

胎児水腫は予後不良例が多いが、適切な対応によって救命可能例も存在する。2008年1月～2018年12月に当院で妊娠管理を行い、妊娠22週以降に娩出した胎児水腫12症例を対象とし、診療録およびデータベースをもとに後方視的に検討した。診断時期は中央値29週3日（20週2日～33週6日）で、5例に胎児治療（胎児胸腔穿刺・胎児胸腔羊水腔シャント術）が行われ、救命率は治療群80%、非治療群57%であった。

Ⅱ. 特 別 講 演

産婦人科領域における超音波診断の役割～超音波ドブラ法に関する最近の知見

順天堂大学浦安病院 院長

同 産婦人科

教授 吉田 幸洋